

全てがゲームで決まる？なら彼女は化け物だ。

とらchixi

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ただのノゲノラの女性とオリ主の百合を書きたかっただけ。続かわかんない。

一応原作に沿って書いていく。基本原作キャラの視点で進める

# 目次

異世界にログインしました	1
彼女はやはり変わらない	9
白と黒の狂依存	15

## 異世界にログインしました

………空side

カタカタカタカタツ！カタカタカタカタツ！………

「あーっ何とか勝てたああ。………つか妹よ、『名義

のメインアカウントを足で操作するの辞めてくんない？兄ちゃん心臓に悪い」

「………おなか………すいたから。………に何も食べる？」

白がカロリーメイトを俺に向けてくる。

「………頂きます」

貰ったカロリーメイトを口の中に放り込むと、パサパサした食感が口の中の水分を奪っていく。

喉が乾いたからそこら辺にあったジュースを飲み、パソコンに意識を向ける。そこで白が何やら聞いてきた。

「………にい。黒から………連絡………来てない？」

「あー、兄ちゃんの方には来てないな」

「………そっか」

「白。兄ちゃんが連絡出しておこうか？」

「………うん」

んー黒って誰だっけ？そうだなあ簡単に言うとな白の初恋の相手だな。ん？白に恋人が出来てもいいのかわかって？まあ兄ちゃん的には相手が黒だからいいんだけどね？だって目の保養になるしね？あ、今更だけど黒は女性だからな？百合って素晴らしいだろ？ここが全て遠き理想郷だったのか。

「………にい。黒で変な事考えてたら………許さない………よっ！」

「待って待って！妹よ！兄ちゃんはそんな事一切考えてい、いませんけどごどど！」

「動揺してる？黒に………報告？」

「それだけはやめて頂けますか！妹よ！」

「………ん、許す」

白の前で黒の事を考えたら、兄ちゃんの身が持たない。  
ピロンッ!

「…来たッ!」

白が慌てたようにタブレットに視線を移す。

「にい!黒から返信来た!」

「そうだな。なんて書いてある?」

「…:お金いっぱい稼いだから遊びに来るだつて」

「黒も大概だな」

「…黒は天災<sup>天オ</sup>。白より凄<sup>オ</sup>い」

「んでいつ来るつて?」

「…:今から?」

ピンポーン

家のインタホーンが鳴る。基本俺たちの家に来る奴は宅配便か黒だが、この際は黒がやってきたのだろう。ほら、白が慌てて扉を開けに行つただろう?

「黒!会いたかつた!」

「し、しろ!苦しい!」

白が黒を部屋に招くと同時に黒に抱きつく。抱きつかれた黒はあたふたと俺に助けを求めていた。だが断る!アイコンタクトでそれを伝えると黒は捨てられた猫のような目でこちらに視線を送ってくる。

だがそれもつかの間、抱きついてた白が黒の頬に手を合わせると白の方に寄せては、キスをした。白の小さな手が黒の服の中に入り黒の顔は我慢しているのか目を瞑つて白の攻めを耐えていた。18禁は白にはまだ早いので流石に止めるぞ!

「妹よ!18禁はまだ早いぞ!兄ちゃんはその事許しません!」

「にい。女の子同士だからセーフなの」

「し、しろ?今はそんな気分じゃないかな?」

「ならにいが寝たら続きしょ?」

「空!一生寝ないでください!」

「俺に死ぬと言ってるのか!」

ピロン♪

そんなバカ騒ぎをしているとパソコンからメールの着信音が部屋に響いた。

「……にい。メール来てる?」

「誰から?」

「にいの…友達?」

グサツ!

「あつれー? 兄ちゃん黒以外の友達なんていないんだけどなー? 白さんはそれを知って言ってるのかな?」

「……気の所為」

「つて、相手からのメール見ないの?」

黒がパソコンの方に指を指して言ってくる。

「えーなにになに?……」

空がメールを読み上げる。

『』達へ

『君ら兄弟・友は、生まれる世界を間違えたと感じた事はないかい?』

「なんだこれ? つかなんで俺ら」 『が兄弟だって知ってたんだ? それに黒の事も分かってるような言いぶりだなあ。』

「……どうする?」

「駆け引きのつもりか? まあ、ブラフだとしても乗ってみるのも一興か」

カチツ。

画面が切り替わるとチェスのボードが出てきた。

「あ、チェス?」

「…おや……すみ」

「……チェスですか?」

白はチェスと分かった途端眠ろうとしたが、流石に俺じゃ高度なプログラムだったら俺一人じゃ手に負えないから白に頼み込む。まあ黒も出来るが、黒のチェスはホントにルール無視だから参考にならない。

俺がそう言うと言はムスツとしてから黒に視線を送ってからチェ



「はあアアアアア」

「勝ったああああ！」

「こんな苦戦したの黒とのチェスぶり：相手ほんとに人間？」

「お疲れ様2人ともこんなにも接戦とした勝負ほんと良かったよ？興奮が治まりきらないよ」

黒は肩を上下に揺らしながら俺達に試合の感想を言ってくる。

そんな黒に興奮したのか白が黒にジリジリと近づきそこには百合の空間が出来てしまった。これ以上は見せられないよ！

ピロン♪

パソコンからまたメールの着信音が響く。

相手からのメールだろうと思いきや開くと予想外な返信だった。

『おみごと。』

それほどまでのゲームの腕前——

さぞ、世界が生きにくくないかい？

君達は、その世界をどう思ってる？

楽しいかい？

生きやすいかい？

』

「んなわけないでしょ？僕だってこの世界はとても残酷で悲惨で生きてても意味が無い用な場所」

「ルールも目的も不明瞭な中、70億ものプレイヤーが好き勝手に手板を動かし、勝ち過ぎても負け過ぎてもペナルティ。パスする権利も無く。喋り過ぎたら疎まれる。パラメータも無くジャンルすら不明こんなものただの「クゾケー」」

『もし、単純なゲームですべてが決まる』

世界があつたら——

』

「ああ、そんな世界があるなら」

俺達「僕達3人は生まれる世界を間違えたわけだ」

途端パソコンの全面面が砂嵐になり画面の中央から手？みたいなものが現れ、いきなりこう言った。



『僕も、そう思う！』

君達は正しく生まれる世界を間違えた！  
ならば

僕が生まれ直させて上げよう！

君たち3人が生まれるべきだった世界に！』

瞬間、俺達は遥か上空に居た。そのまま急降下している最中だった。

「ようこそ！僕の世界へ！」

「「なんだあこれええ!!」」

そんな中、帽子を被った少年？ 見たいな子が呑気に説明をしてきやがった、

「ここは君たちが夢見る理想郷！盤上の世界 ッディスプレイ！」

この世のすべてが単純なゲームで決まる。人の命も、国境線さえも！」

白がその説明している相手に尋ねる。

「……誰？」

「僕？僕はテト！あそこに住んでる。…神様？」

「神様？」

「それどころじゃねえ！どうすんだよこれ！」

俺がテトに対して尋ねるが、テトはそのままこの世界のルールを説明しだした。そんな事してる暇ねえだろおおお！

「この世界は100の盟約によってすべてが決定する！」

〔1つ〕 この世界におけるあらゆる殺傷、戦争、略奪を禁ずる

〔2つ〕 争いは全てゲームによる勝敗で解決するものとする

〔3つ〕 ゲームには、相互が対等と判断したものを賭けて行われる

〔4つ〕 ッ三〃に反しない限り、ゲーム内容、賭けるものは一切問わ

ない

〔5つ〕 ゲーム内容は、挑まれたほうが決定権を有する

〔6つ〕 盟約に誓って〃行われた賭けは絶対遵守される

〔7つ〕 集団における争いは全権代理者をたてるものとする

〔8つ〕 ゲーム中の不正発覚は敗北と見なす

「9つ」以上をもつて神の名のもと絶対不変のルールとする」

「だからそんな事言ってる場合かああアア!!地面が!もう地面があああ!」

「にい!」

「空っ!白!もう間に合わないよ!」

「白ッ!黒ッ!」

せめて白と黒だけでもッ!2人を抱き寄せ俺をクッションのようになる姿勢にする。そして来ると思われる衝撃に構えるが……来なかった。

呆然としているとテトが俺達をのぞき込むように見て最後のルールを言ってくる。

「そして10!みんな仲良くプレイしましょ!」

「っておい!」

俺が起き上がり声を掛けようとするとテトはもう居なくなっており、辺りを見回していると何故か、俺の右手に柔らかい感触があった。

「んッ!空あく。擦ったいよ」

「って、すまん黒!大丈夫か?」

「別に!僕は大丈夫だよ?けど!白が怒ってる?かな」

「……にい。黒のおっぱい揉んだ。白はまだ今日揉んでないのに」

「待て待て!兄ちゃん不可抗力だから!」

「…でも、にい。顔ニヤける。Guilty」

「もう!空は僕の胸をそんなに揉みたいの?仕方ないな。もっぺん揉んでおく?」

「……黒。白以外に揉ましたら駄目」

「ちよつと待て!2人とも!今はそんな事してる場合じゃないだろ!

ここは何処なんだよ!」

俺達が落ちたクレーターから上がると周りには石が浮いてたり、空想上のドラゴンが飛んでいたりした。

「妹、黒よ」

「んっ」

「どしたの?」

「人生なんて無理ゲーだ。マゾゲーだと何度となく思ったが……遂にバグったああ！」

「もう何これ」

「超クソゲー」

「アハッ！空も白も何言ってるの？こんな面白そうな世界素晴らしいじゃないか！僕をこんなにも楽しませてくれるなんてこの神様？は凄いじゃないか！あーテトに会いたいなあー。興奮するなー。楽しんでみだなー」

「黒は相変わらずだなーH A H A H A」

「…黒。浮気は駄目」

白は黒に抱きつきながら咎める。そんな白に抱きつかれてる黒はえへへーと笑って白と抱き合っていた。文字だけだと卑猥に見えるな。ってそうじゃねえ！

俺達これから大丈夫なのだろうか。まともな奴がいらないんだけどおとおお！

彼女はやはり変わらない

………空side

俺達がこの世界に訪れてから数時間が経過したんだが、その間に3人のバカ共からゲームを挑まれ、俺達が勝つたら身ぐるみ全てとこの世界の情報を貰う事にして勝負をした。もちろん俺達が勝った。

まあ、なんとか歩き続けて街までたどり着いた。その時点で白が眠たそうにしていたからそろそろ寝泊まりが出来るが場所を探さないと。そう思って辺りを見回すと、店の真ん中でゲームをしている2人組を見つけ窓の方で傍観してる相手に聞いてみた。

「なあ、あんた。あの人だからは何なんだ？」

「はあ？あんた知らないの？次期国王選定ギャンブル大会よ」

「次期国王選定ギャンブル大会？」

「前国王の遺言でさ。次期国王は人類最強のギャンブラーに体現させるってね」

「へえ。国王もゲームで決まるのか」

「あっちの赤い髪の子が『ステファニー・ドーラ』前国王の孫娘よ。前国王の遺言で毎回ゲームに参加してるのよ。そして、その相手が『クラミー・ツエル』って言つてとてつもなくヤバイ奴よ」

説明を終えた相手は、今もギャンブルをしている2人を見ている。俺は話しかけた目的を果たす為に敢えて相手に挑発を仕掛ける。

「へえ、あんたは参加しないのか？」

「あたしかい？あたしはこれがあるからいいのよ。それに、相手のクラミーって子がバカ好きでさ。強すぎてほかの連中が辞退してしまいうぐらいにね」

「ふーん。つまり、怖気付いたってわけだ。」

「ッ！なんだって!?!」

「まあ、ここで負けたって事実がなければあ後からいくらでもいいおうがあるからなあ？実は勝てたんだが……見逃してやったんだとかな？」

「ふーん。面白いじゃない……やるかい？坊や」

掛かった。

「悪いがお遊びのゲームはやるつもりは無い……。その有り金全部だ」

「はあ!?いくらあると思ってるの!互いが対等と判断したものを賭けないとゲームは成立しないのよ!!」

白と黒が俺の背後に来て黒が相手に提案した。

「なら僕を差し出すよ。それでどうだい?」

急に出てきた黒に相手は驚きながら黒に確認した。

「あんた、本気?」

「僕は嘘が嫌いなんだ。それに君が勝てば僕を好きなように出来るんだよ?例えば……。ほかの男に僕を売ればもつと大金が入るでしょ?ほら、僕のスタイルつてさ意外と良くてさ?ほかの男からしたら大金叩いてでも欲しがると思うよ?」

「あんた。狂ってるわ」

「良く言われるよ」

黒がここまでお膳立てしてくれたんだここからは俺が仕切ろうか。

「さて、どうする?ゲームはポーカー1回勝負。こっちの掛け金は黒だ。」

「……………」

「辞めるなら今のうちだぜ?」

「クッ!この余所者が!いきがるんじゃないよ!やってやろうじゃないの。盟約に誓って」

「盟約に誓って」

「盟約に誓ってアツシエンテ」

相手がカードを切り、カードを配っていく。白と黒はもう結果が分かっているのかこちらを覗いていない。

「(ふん。アンタの村じゃそのはったりが通ったとしてもここでは通らないわよ!) あんたの番よ。」

「はあ」

カードを全部変える。これで仕掛けは終わった。

「あらあ?ついてないわね。可哀想に」

「ああ。今日1日で高度1万メートルからのスカイダイビングで炎天下の中歩き続けていたからな。確かについてない。」

「なんの話し?」

「別に。いいのか勝負で?」

「あたしはいいわよ? 特別にもう一度だけ交換させて上げてもいいけど、どうする?」

「遠慮しとく」

「そう? それじゃあ…… 悪わいね坊や! フルハウスよ!!」

「ああ、そうだな。確かに悪い」

「え? ろ、ろ、ロイヤルストレートフラッシュユウウウ?!! ありえないわ」

「よく見る事実だ」

「嘘よ! 嘘よ嘘よ嘘よ! だって65万分の1の確率よ!」

「その65万分の1が今だったんだよ」

「でもっ!」

「盟約その6。賭けは絶対に遵守されるだったよな」

「いったい…… 何者よ」

「別に…… 余所者だよ」



酒場のテーブルで待っている黒と白に戦利品を見せつける。

「兄ちゃん稼いできたぞ」

「にい、ずるい。あんなわかり易いイカサマ」

「空はイカサマ好きだもんね!」

「10の盟約その8。』ゲーム中のイカサマは不正発覚とみなし敗北とする』要するに、バレなきや負けじゃないんだよ」

俺は笑うように2人からの白い目を避けて酒場のオーナーに頼む。

「3人一部屋。ベットは2つある所がいい、これでいくら泊まれる?」

「1泊だ」

「またまたあ。騙し取るんだったら目線と声のトーンに気おつけな?」

「ちっ！2泊だよ」

「言つとくぞ？嘘を付くなら相手を慎重に選べ」

「…… はあ。4泊だ」

「ありがとうよ！」

「あんた、名前は？」

「空白でいいよ」

待っている白と黒はステファニー・ドーラとクラミーのポーカーを  
観戦していた。

「待たせたな白、黒」

「…… あの人……… 負ける」

「んーあの赤髪の子はポーカーフェイスを知らないのかもしれないね  
！でも、涙目の姿も可愛なく」

「黒。また…… 浮気してる」

「もう！白ってばここは人が多いでしょ！服の中に手を入れないの  
！」

また、白と黒の百合空間が出来てしまっている。俺としては特なん  
だが周りの視線がな？うちの白と黒を見てやがるから出来れば辞め  
て頂きたい。

「白と黒！こんな所でやるより宿取ったから、いちやつくならそこで  
いちやつけー！」

「にい……… グツジョブ!!…… 黒?……… 早く逝くよ?」

「白?なんか字が違う気がするんだけど!?なんでこの時に限って力強  
いの!?まって服がはだけちやうから引つ張らないで！」

「兄ちゃん後で行くから気にしなくていいからなー」

「空ああく見捨てないで助けてよー！」

涙目でこっちを見てくる黒に俺はこう伝える。

「妹には勝てないんだよ……黒」

はあ、白の時間を邪魔出来ないから時間潰さないとな。それにしても  
ステファニーと言ったかな?ポーカーがまだ続いているが負ける  
のも仕方ないだろ?だってクラミーのやつイカサマしてるからな。  
白も見ていたから聞いたが、白の計算でも先が読めないみたいだ。

まあ、黒はその2人を観ずに、酒場の端っこにいるフードを被ってる相手を見ていたからな。ツ！なるほどね、この世界はさぞかし人間には辛いだろ。黒が見ていたのは耳がとがったエルフだった。

「この世界まじかよ」

1人愚痴を零してしまうが逆に面白い！自然に笑みが零れてしまう。

2人が最終ゲームに入った所で俺の優しさを見せるか。

「おたくイカサマされてるよ」

場所は変わって俺は白たちがいる部屋の前に着いた。

「白ー入っても大丈夫かー」

「……大丈夫」

白からの許可が降りたからさそつく入りますかー。

今俺の目の前の現状を教えよう。

黒が凄く痙攣した状態で白に抱きつかれていた。しかも、肩で呼吸しているのとシャツが少しはだけているせいか黒のおぱーいが見えそうで見えないラインをさらけ出している。俺の妹は満足そうに黒を抱いて寝ている。なんて恐ろしいんだ！俺の妹は！

「そ、そらああ。し、しろが激しすぎて、ンっ！」

「お、そうか。そ、それで黒は大丈夫か？」

「な、なんとかああ」

「………黒。………可愛かった。………満足、おやすみ」

白が寝たおかげか黒が息を整えて俺に訪ねてくる。



「これからどうする?」

「そうだなあ、取り敢えず寝るか。起きたらまた考えよう」

「そうだね。あ!空たまには一緒に寝る?」

「いやいやいや!?兄ちゃん白に殺されるわ!」

「ふふん。冗談だよ!おやすみ」

そう言っつて黒は白の隣で寝息をたてている。てか寝るの早いな!

## 白と黒の狂依存

黒サイド

コンコンツ

「ふああ。んぐだれかきたの?」

眠い目を擦って気だるい体を起こして扉を開けに行く。

「新聞ならいらないよ」

「え、あの、しんぶん?」

「あ、そう言えばここ家じゃなかった」

「あの!この部屋は変な男性の方では無いのでしょうか?」

「変な男って空のこと?んー空なら今寝てるからどうしよ?取り敢えず入る?」

「し、失礼しますわ。」

赤い髪の子ソワソワしてるな。服装もなんか布?みたいな服だしあれ?昼見た時もって赤い服じゃなかったけ?まあ、どっちでもいいや。

「それで君は空に何かようなの?」

「そ、そうですね!あの男が私にイカサマをされてると仰ってましたの!それで、ゲーム最中に教えてくだされば不正発覚で勝てましたのに!」

「ああ、あの時のポーカーだっけ?」

「そうですね!」

「うーん、これ言ってもこの世界の君じゃ分かんないと思うけど、あのイカサマは魔法でされてたからどうしようも無いと思うけど?」

「へ?私はクラミーに魔法を使われてたと仰いますの?でも、クラミーはイマニティですわよ?魔法適性ゼロなのにどうやって!」

「えっとね、君がそのクラミーって子とポーカーしてる中で酒場の端っこにエルフいたよ?そのエルフがクラミーに手を貸してるんじゃない?」

「そ、そんな。なら私がやってた事は無意味だったって事？お爺様との大切な約束が果たせないなんて！」

赤い髪の子が急に泣いてしまったからどうしよう!?どうにかして泣き止ませないとー!

「えつとまだ名前聞いてなかったけど僕の名前は黒!君の名前は?’」

「ステファニー・ドーラですの」グスツ

「ならステフ!僕が君を助けてあげるよ!’」

「ほ、ほんとですか?’」

「うん。任せてよ!こう見えて僕はゲームが得意なんだ!’」

「ありがとうございますわ!’」

僕がステフと約束をしている所で空が起きた。

「ふあゝ、何1人で騒いでるんだ黒さんや……黒が知らない女を入れている!?’こ、これは白が起きたら修羅場になるんじゃない?’」

「……に、うるさ……い?黒……その女誰?’」

白が起きた途端に目のハイライトがoffになった状態で僕に詰め寄ってきた。

「こ、怖いよ!しろ!しかも近い!’」

「……黒。質問に答えて」

「えつとく、なんて言えばいいのかな?僕の友達?’」

「……黒?しろ以外に友達がいるの?黒にはしろだけでいいんだよ?ねえ、しろのこと嫌いになったの?……また1人にするの?’」

ハイライトがoffの状態から次は泣きそうな顔で僕を見つめてくるしろ。こんなしろを見ると、なんだが胸の当たりがキュウつて締め付けられるんだよね。

「しろ。僕はねしろのことがとっても大好きなんだよ?だから、1人になんて絶対にしたくない。これだけは僕の全てを掛けてもいいぐらい。

だからね…… シロハボクノコトミステナイデネ?ゼツタイダヨ?シロニハボクガイルンダカラ…… ホカニナニモイラナイデシヨ?ほら…… こっち来て」

「…… うん。しろも黒のこと…… 好き、好き、好き、スキ、ダイスキ。ゼツタイニハナレナイ。ニガサナイ。ズツトイツシヨ。ク

ロタリナイヨ………モットシロニチョウダイ」

しろが僕に詰め寄ってくる。これでもかという程に身体を抱き合わせ、腕の中に、瞳の中に、心の中に僕としろが溶け合う感じがまた心地良さを表し、その渦に溺れていく。周りからみたら僕と白はおかしいかも知れない。でもこれが僕達だから、シカタナイヨネ？

黒side out

空side

「な、なんですあの御二人は、正気じゃないですわ」

そこにいる痴女と思われるも可笑しくない子が白と黒の光景をみて唾然としていた。まあ、初めて見る人からすると白と黒は異常とも呼べるんだろうな。俺からすると白と黒の過去を知っているから大丈夫だが、知らない奴からしたら目の前にいる2人は狂っているように見えるんだろうな。

白と黒は定期的にあの症状が起りやすいんだよ。特に、白が情緒不安定になるとよく起こることだ。2人の精神が安定すれば戻るんだが、これが意外と厄介なものなんだよ。可愛い妹と唯一の俺の親友だ。こんな状況になったとしても面倒見てやるのが兄つてもんだ。

「そこのおまえ、俺に何か用があったんだろ？」

「そ、そうですわ！危うく忘れかける所でしたわ！」

そのステファニー・ドーラが言うには昼のポーカで負けたのがイカサマだったのが分かって、それを教えた俺に会いに来た所で黒と出会い何やかんやで助けてやると言ったみたいだ。

「はあ、黒がお前を助ける判断したんだったら助けてやる。けどな、こつちだって無償で働くのは理不尽だよな、それは分かるか？」

「と、当然ですわ！わたくしの名に掛けてお礼を尽くすに決まっていますわ！」

「言質とったからなステファニー。じゃあ、この世界らしくゲームで閉めようじゃないか。丁度ここにはトランプがある。ルールは簡単

だ、お互いがカードを2枚取り1枚をオープンし勝負が始まる。このゲームではカードのトレードが1回だけ許されている。オープンされている奴でもいいし伏せたカードでもいい。そして、トレードが終わった2枚のカードで数字が相手より高ければ勝ちだ。勝利の報酬はお互いが1つの命令権を所持する」

「単純な運任せの勝負ですか。分かりましたわ！このステファニー・ドローラが勝利を掴み取ってあげましょう！」

俺は新品のトランプを箱から取り出シヤツフルをし始めた。

さて、黒の為に人肌脱ぎますか。